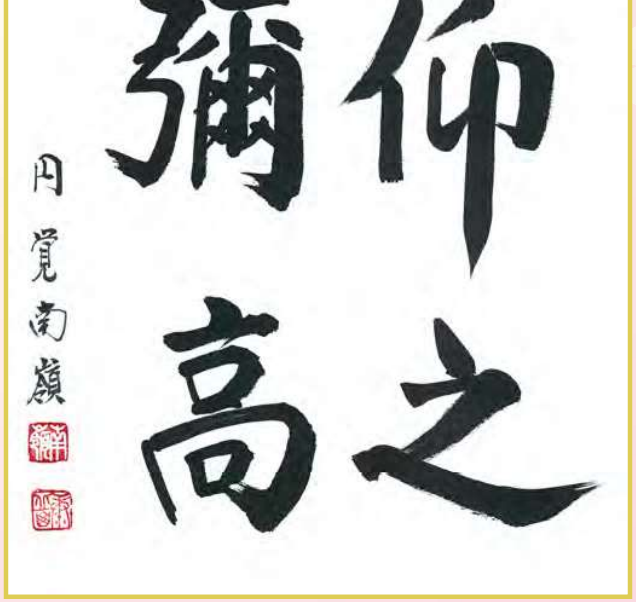

「これをあおげばいよいよたかし」
出典『論語』

円覚353号 目次

横田管長のお話
「仰げば尊し」…… 1
管長のページ …… 8
信心ことはじめ㊷ …… 10
明治居士列伝⑩／蓮沼 直應 …… 12
「慈悲が過ぎた」忍性／桜井 竜生 …… 16
仏舎利・旅物語～インド編～／横山友宏・由馨 …… 20
精進料理レシピ／藤川 譲治 …… 22
円覚寺の至宝⑱…… 24

表紙・裏表紙写真／円覚寺派宗務本所

横田管長のお話

仰げば尊し

「仰げば尊し」という歌があります。

私などは卒業式というと、この歌が思い浮かぶのであります。

仰げば　尊し　我が師の恩
教えの庭にも　はや幾年（いくとせ）
思えば　いと疾（と）し　この年月（としつき）
今こそ　別れめ　いざさらば

から始まる歌であります。

この歌が歌われなくなっているという話を聞きました。

この歌は明治十七年に発表された唱歌で、昭和から平成のはじめ頃までは歌われていたそうなのですが、最近はもう歌われていないのです。私のまわりにいるお若い方は、もう全く知らないと言います。

歌われるものが変化するのは世の常であり

ますが、この歌にあるような仰ぎ尊ぶ心が薄らいでいるようなら、残念なことに思います。

「我が師の恩」というと、私はなんといっても先代管長の足立大進老師のことを思います。実に三十年ほどおそばに置いていただいて修行させてもらってきました。

私たちの世界では、尊敬する方のお名前を直接呼ぶことを避ける習慣があります。足立老師には、「慈雲」という道号がありますので、慈雲老師とお呼びする場合もあります。

また老師は「栽松軒」という室号もお持ちでありました。老師方はご自身のお部屋に名前を持っておられます。それで、その室号でお呼びするのであります。今でもご皇室を「何々の宮様」とお呼びするのと同じであります。ここでも老師に敬意を表して栽松老師と呼ばせていただきます。

その栽松老師もこの春で七回忌を迎えることになったのでした。七回忌というと丸六年が経つことになります。

栽松老師は、「慈雲」という道号のように、一般の信者さんたちには和顔愛語で穏やかに優しく接しておられました。栽松老師のご縁のあった方には、実に慈しみ深い老師でありました。おそばにお仕えしていても、その親切なることを強く感じていました。しかし、私たち修行僧に対しては、いつも眼光鋭く、とても厳しく接してくださいました。

私は昭和の終わり頃、京都の僧堂でしばらく修行していて、鎌倉に移ってきたのは、まだ平成のはじめ頃でした。栽松老師もまだ五十代でした。はじめて円覚寺僧堂の禅堂で、摂心という修行に臨んだ折に、夕方から栽松老師が禅堂にお入りになってみえました。

足立大進老師

それまで僧堂の老師が禅堂にお入りになるというのはあまり経験がなかったので、それだけで驚きでした。

更に驚いたのは、老師自ら警策という樫の棒を持って修行僧たちを大きな声で叱咤激励されてまわるのでした。まるで荒々しい野武士のような迫力に圧倒されて、臆病な私は禅堂の片隅で震え上がっていました。こんな老師のもとでは、私のような弱虫はとても務まらないので、早くどこかに行こうとばかり考えていました。

しかしながら、老師の提唱(禅の語録の講義)を拝聴すると実に素晴らしいのです。当時は『佛光録』という、円覚寺の御開山佛光

国師の語録を提唱なされていました。

難解な『佛光録』を明快に提唱されます。快刀乱麻を断つ如くとはこのことかと思いました。老師のお話に魅了されておそばに置いてもらうようになりました。

老師はいつも怒っている方でありました。それは悪い意味での怒りではありません。正義感の強い老師であり、道義を大事にされていたので、今の世のありようを歎き、憂い、そして怒っておられたのでした。その怒る対象は様々で、大は国家、政府に及びます。

また今の仏教界のありようにも常にお怒りでありました。お釈迦様の教えを慕い、朝比奈宗源老師や山田無文老師を師と仰ぐ

老師は、現代の仏教界には悲憤慷慨されていました。

今の臨済宗の僧侶にも常にお怒りでした。もっと修行しないといけないと仰せになっていました。修行年数が短いのに修行道場を去ろうとする者には容赦なくお怒りになっていました。

それから円覚寺のありようにもお怒りでありました。本来拝観料などは取るべきではないとは老師の持論でありました。

そして今の修行僧にもお怒りでありました。ですからおそばに置いてもらって、私はいつもこの怒りが自分に向かないようにとばかり念じていたものです。

掃除の仕方がなっていない、料理に心がこもっていない、日常の些細なことにも常にお叱りをいただいていました。

私は老師のあと管長を務めることになってしまい、管長として本山儀式の導師の役を勤めることになりました。はじめの頃は、その導師の手順を間違えないようにとばかり気になっていました。それでは大事な心を込めることがおろそかになってしまいます。

ある時栽松老師が、「焼香して礼拝する時には、これで今生最後だと思って勤めるように」とお教えくださいました。導師の役では何度も礼拝を繰り返すのですが、そのたびごとに、これが今生最後だという気持ちで心を込めるようにとのお教えであります。

私は今も焼香するたびに、この老師のお言葉が耳に残っていて蘇るのです。

私などのような横着者は、このように叱咤いただかなくては、もっとぞんざいな礼拝しかできなかったろうと反省するのです。

老師の御最期を臥龍庵でお見送りしました。あれからもう六年が経ちます。

お見送りした時に、はずかしながら私は、もうこれで老師のお叱りを受けることはないだろうと思っていました。ところが豈図らんや、老師のご叱正は今もやむことはないのです。

仏様の前で焼香するたびに「これで今生最後と思え」という言葉が響いてきます。そして折に触れてお怒りのお姿が、そのお声が現れるのです。

須磨寺の小池陽人さんは、尊敬なさっている和尚様のお心を受けて聖徳太子の糞掃衣を今の世にお作りになりました。糞掃衣というのは、もとは路傍に捨てられた布切れなどを集めて縫い合わせた粗末な衣のことです。これが最も尊い御袈裟なのです。聖徳太子の糞掃衣が国立博物館に所蔵されているのです。その糞掃衣を作ろうとなされて、できあがる前にその和尚様はお亡くなりになったのでした。

小池さんはいつもその糞掃衣を身につけてご法話をなさっています。そして、その糞掃衣をつけるたびごとに、亡き和尚様に会えるのだとおっしゃっていました。ご生前よりももっと多く会うことができるのだというのです。

栽松老師をお見送りして六年経ちますが、私もまた日常の所作のひとつひとつに老師のお声が聞こえてきます。時には夢にも現れて叱ってくれています。優しい言葉をいただくことはありません。

しかしそのお叱りの声こそが、怠惰な私を励まし、そして支えてくれているのです。

七回忌を迎えても老師は今も私にとっては生きておられるのであります。「仰げば尊し」の思いは年と共に深くなるのです。